

令和5年度 苫小牧市図書館協議会第1回臨時会

令和5年11月1日(水) 午後1時30分

苫小牧市立中央図書館 2階講堂

【議事】

- 議 長 それでは、早速、議事を進めてまいりたいと思います。
今回の会議は、第四次苫小牧市子どもの読書活動推進計画が終了となり、第五次計画を策定していく中で、図書館協議会のみなさんの意見を伺いたいということでの開催となっています。それでは、(1)第五次苫小牧市子どもの読書活動推進計画(案)について、ご説明をお願いします。

<生涯学習課より資料に基づき説明>

- 議 長 ありがとうございます。
では、ただいま説明について、ご意見、ご質問等がございましたらよろしくをお願いします。
- 委 員 読書率の低下というのはよくわかりますが、読書の低下が文書力の低下との関係がわかるのもっといいのかな。
例えば、タブレットで文字を読んでいることには変わらないし、これは増えていると思う。
問題は、読書力イコール文書読解力のような相関関係で、紙で本を読まなくても、タブレットで見て読むということの効果があがっていれば、タブレットの利用の仕方を考えるとか。相関関係みたいなものがあって、それによるアプローチの仕方の変更。例えば、本を紙でなくて、電子文庫をもっと準備するとか。そういったところとの関連があるのかな、と思ったものですから。
- 事務局 今のところ、そこまで深くは入り込んでいない状況で、まずは本を読んでもらう入口が、実際に数が少なくなっている傾向にありますので、何とかしたい。確かに、委員おっしゃられるとおりタブレットが普及して読書率が下がっている可能性がある中で、タブレットを通して

本を読んでいる可能性も当然考えられるかと思います。ただ、その数が今のところまだ、取りづらいのだろうと思っています。現段階で第五次計画では触れていませんけれども、計画を進めていく5年間の中で、そのあたりのところはきっと出てくるのかな、というのはこちらとしても考えてはいます。ただ、それがきちんとはとれるようになっていくかどうかは、途中の見直しとかですね、第六次計画の時に検討させていただくような形になると考えています。

○議 長 ありがとうございます。今のご質問に関連して何かございませんか。タブレットに触れる機会が増えているお子さんが多いということは現実としてありますので、例えば、具体的な年度ごとの事業の中で、タブレットを通じた図書館とか、書籍のPRなど行っていきつつ、その事業の中でタブレットを活用したようなもの、で、図書にも結び付くような事業があればいいと思いました。

○事務局 基本目標の推進方策1の読書活動の推進の中で、PRの促進という記載があります。資料1の真ん中、右側のところに書いてありますけれども、「うちどくパンフレットの配布」等の具体的な項目で取り組んでいけると考えております。

○議 長 はい、ありがとうございます。

○事務局 GIGAスクール構想でタブレットが導入されたのが、比較的最近のことになります。関係部署にも確認しましたら、活用については、まだ学校でも試行錯誤をしている状況ということでしたので、今、議長のおっしゃっていただいた、タブレットを活用した取組というのは今後出てくると思います。我々としても学校図書館ですとか公共図書館でタブレットを活用した読書に関する取組をやっていけたら良いとは思っていますけれども、まずは、どういった活用ができるかというところで、5年間通して色んな取組をされてくと思いますので、経過を見ながら情報収集を進めたいと思っています。

○議 長 はい、ありがとうございます。

○委員 私は、障がい者の就労訓練の事業所で勤めています。タブレットの話を知るとすごく思うのが、障がいをお持ちの人たちは、残念ながら、本当に図書館を利用しないんです。子どものころ、親御さんが読んでくれた経験はあったとしても、自分が携わるということが本当にゼロです。この方たちが図書館を活用しながら、その人の豊かさに繋がるような

ものを、私も考えられないかなと思って、今ここにいるんですが、まだ全然考えられてないんですけれども。

タブレットの件ですが、高等養護学校を出られて弊所に入って来た人は、GIGAスクール構想の中で3年間過ごしていて、どこかのタイミングでタブレットだけになった生徒さんたちは、それしかもう活用されていません。紙の本は本当に一切無くなったかのような感じで、メモを取るのも紙とペンではなくて、タブレットの中でメモを取りだしています。

子どもたちのほうが、新たなものを教えてもらってどんどん覚えていって、それだけで暮らしていくようになっていきます。すぐに順応していると言えそうです。そんな中で、じゃあ紙とペンに戻ろうとか、紙の本を読むっていうのは、今、目の前にいる人と関わっていて本当に難しいと思います。なので、紙の本に絶対に戻すということではなく、今のようなタブレットからの読書っていうところから、本というものと繋いでいかないと、今更、戻せないだろうということは本当にすごく感じています。そう言いながら、メモのほうは、頑張っ紙とペンに戻しているんですけれども。

○議 長 委員のところにはいらっしゃる方たちは、大体年齢層はどのくらいですか。

○委 員 幅広いんですが、今は、18歳の高校卒業した方から20代前半の人が16、7人いらっしゃって、あとは30代、40代、50代の年齢の高い方も少なからずいらっしゃいます。でも今、若い世代が多いと、いっそう今のそれしか見てない、みたいな感じになっています。だから、スマホの中の小説はすごく読んでいるっていう人も、中にはいるんですよ。でももう、紙の本には一切触れたことが無いという感じです。

○議 長 ありがとうございます。

○委 員 ICT端末環境について教えてほしいんですけど、今回の資料1の2ページの下のところ、「一人一台端末のICT端末環境を活用した学校図書館の積極的な利活用を進めていく必要があります」というところについては、「まずは環境の整備」ということで、「ICT化の整備」と「Wi-Fi環境の強化」というのが挙げられています。中央図書館ではなくて学校図書館の話だと思うんですけど、ICT端末環境、タブレットを使って学校図書館の積極的な利活用は、どうやったら進

むか、私にはイメージが無くて、具体的に一つ考えられてる例を教えてください。

○事務局 この「学校図書館の積極的な利活用を進めていく必要があります」、という部分は、北海道の計画の内容になります。実際、指導室の先生にお話を聞きましたら、先生も道の計画に書かれている「学校図書館の積極的な利活用」ということが、あまりイメージがつかないということでした。例えば、タブレットを使って自分の学校図書館の貸出状況がわかるですとか、授業の中でタブレットを使いながら調べ学習ですとか、学校図書館の本を使っていく。そういったことが、おそらく北海道で言っている「利活用」といった例、だと考えておりますが、まだ、その段階には到達していません。

○委員 ということは、今、市の図書館の蔵書検索は、スマホとか自宅のパソコンからできると思うんですけど、学校図書館の蔵書の検索はおそらくできないだろうと思うので、それをできるようにしましょうという例だと思います。

もしそれだけであれば、そのためにお金をかけてICT端末を整備するというのは、ちょっと私としてはピンとこないのと、資料で「まずは環境の整備」って書いていますが、今の感じだと、整備しました、でも使えません、で終わってしまいそうな気がしています。もうちょっと具体的な、環境整備してから想定しているものが、実現できるかどうかは別としても、何か一つ二つ無いと、何のために整備するのかがわからないような気がします。すいません、私自身がわからなくて聞いているんです。小学校や中学校の蔵書検索が出来ますだけだったら、毎日行っている学校なんだから、図書館行ったほうが早くて。たくさんある本を見て、好きな本を選ぶっていうほうが、よっぽどまともな気がするんです。そこに、あえてICT端末を使うっていうのが、なんか良くないことを推進している気がしてならなくて。どういう風に考えてこういう風に見えるのか教えてほしいです。

○事務局 実際には順番が逆なんですけれども、読書計画推進のためにWi-Fi環境やICT端末を整備してくということではなくて、そもそも学校のICT計画を進めていく中で、現状でWi-Fiがまだ完璧ではないところをGIGAスクール構想の中で整備していく。その中に、学校の読書の部分も一緒に乗せていきたいと思います、というところが、こちら

としてはあるわけなんです。ですから、これを読書のただそれだけのためにやるのではなくて、大きなところは学校のICT環境の中で、その中で、我々の読書計画に何が載せられるだろうか、というのが今後の課題になっていくんだらうと思っています。ですので、整備したのが単純に無駄になるということではなくて、実際、別のほうで使われてくることになります。

○委員 私、実はGIGAスクール構想で整備したのはよくわかっていて、なぜここにあるのかがわからないんです。北海道の図書計画に、これが載っているのであれば、何か想定しているものがあるはずだと思うんです。それがあれば、同じような取組をこの苫小牧市でも行えば良いと思うんですが、そこが全く見えない。GIGAスクール構想を反対しているんじゃないかと。

○事務局 道の部分が正直見えていなかったのは、先ほどお話した通りです。となると、我々としては、そこに今後、何を載せていけるか考えなければいけない。

○委員 例えば、子どもたちが読んで面白かった本の感想文。そんな手間がかかる感想文ではなくて、一行二行の、読んだ本のリスト化でもいいです。端末を使って読んだ本を登録していくことで、学校全体でどの本が読まれていて、あるいはそこに一言の感想があることで、ああ僕も読んでみたいな、という風になるような、そういうアプリを導入しますとか。具体的にそういう話があれば、まだわかりやすかったですけど。

○事務局 まだそこまではたどり着いていないです。

○委員 別な質問いいですか。

今回の話の中では、本を読む子どもが減ってきてそこを何とかしたい、というのが大きな部分だと思います。それで、「ビブリオバトル」ですとか、今回で言うと、それが、「ひとはことしょかん」に変わったということなんです。実は、苫小牧高専でも、ビブリオバトルを今年開催したんですけど、その結果を先にお伝えすると、本が大好きな人が集まって、それで実施したということで、結論を言うと、読書をしていなかった人が読書をするきっかけにはならないイベントだなあというのが反省事項なんです。好きな人が参加するだけで終わって、読書してなかった人がするきっかけにはならなかった。今回、この市の計画でもビブリオバトルから変わりましたが、この活動というのは、

読んでない人が読むきっかけになる活動になり得るのでしょうか。先ほどの数値が改善するのに繋がる活動なのかどうか。そうでないとなれば、読書をする人を増やす活動っていうのは、何か考えられているのかどうか。そこを教えてください。

○事務局 「ひとはことしょかん」につきましては、委員御指摘のとおり、興味のある子が応募しているのであろうと推察しており、そういう視点では、読書しない子のきっかけづくりにはなっていないと思います。ただ、計画には掲載していませんが、図書館で実施している事業で、「図書館を駆け抜けろかけっこ教室」があります。こちらは、普段図書館に来ないような、例えば体育会系等の足が速くなりたいと思っている子たちに対して、公園で走り方を指導し、図書館の本を使って走り方が書いた本を紹介する取組になりますので、読まない子が読書するきっかけになる活動であると考えています。計画の中では、セカンドブック事業といいまして、生涯学習課でやっている事業なんですけれども、1年生の皆様の本を1冊選んでいただいて、好きな本をお渡しするというものになります。これは1年生全員対象になりますので、本が好きでも嫌いでも、1冊渡すことになります。ただ渡すだけではなくて、本を実際に手にとって選んでいただくために、公共図書館にもあるよ、まだ実施できていませんけれど、ゆくゆくは学校図書館にも対象の本があるよ、見に行っってね、という誘導を行いたいと考えており、どんな子たちにも本を手取る、選ぶ楽しさを知ってもらうきっかけづくりになると考えて、今回、セカンドブック事業を項目に入れさせていただきました。

○委員 わかりました、ありがとうございます。
読書をしない子が増えてきて、そこが問題だと言っているのであれば、そこを解決する手段のほうがむしろ重要だと思いますので、最初の、計画には載ってないですけど、といったところが、本当は載せたほうが良かったのかなと思いました。以上です。

○事務局 読まない子に対するきっかけづくりといった項目を載せられるかどうか、内部で検討させていただきたいと思います。

○議長 ありがとうございます。他に関連した質問、御意見いかがですか。

○委員 先ほどの「ICT化の整備」の次の行に、「Wi-Fi環境の強化」と書いてあります。強化ということは、今、実際どこかでWi-Fiが使

える環境があるんだろうと推察してて、現状がどこまで整備されているのか、大体5年後にどこまでWi-Fiが使えるようになるのか。多くの子どもたちが携帯を持ってるだろうなと思うんですけど、そのところ、とりあえず現状がどうなのかということを知りたいと思いました。

○次 長 先ほどからタブレットの整備というところで、GIGAスクール構想のお話ですが、学校の各教室ではWi-Fiを飛ばして、使えるように整備しています。ただ、一斉に使ったりするとちょっと弱いという問題点がここ2、3年あります。誰が使っていても止まらない様にするということで強化を進めているところです。それと共に、学校のどこにいても使えるような、学校の図書館でも使えるようにということも考えながら順次整備していくところでして、そういったところで、この図書の計画に載せている。別な所で動いていますが、活用していきたいという強化ということだと思います。

○委 員 因みに5年ではもう、大体目標っていうんですか、みんなが使えるような状態にはしたいという風にはお考えでしょうか。

○次 長 そうですね、財政状況等もありますが、今はもう、中学校は大体整備が終わります。全部いっぺんにというのはなかなか難しいですけど、この5年では順次していきたいと思います。

○委 員 そもそも論で恐縮なんですけども、今、小中学校の読書率のパーセンテージが目について、多い少ないという話しに囚われがちなんですけれども、そもそも、中央図書館の活性化、あり方として、中央図書館は学校図書館との連携もあれば、地域の端末図書館との連携もあるというふうな、色々な各窓口の図書館の在り方というものがあると思うんですけれども、結局、どこを今後5年間でどういう形の理想的な中央図書館像を描いておられるか。単に今ですと、小中学生なのか、地域住民なのか、小中学生が少ないと言われても、遠い小中学校から来れないとかですね、物理的な問題もありますので、それをもってどうこう言うべきだろうかとかですね、じゃあ平日と土日利用のパーセンテージを比べてみるとかですね、具体的なデータのとり方とか比較の仕方とか色々なものがあるかなと思うんですが、中央図書館全体的に、中央図書館として全体をどこまで連携を取りながら、どういう方向性に持っていこうとしているのか。で、その中の小中学校との連携はこう、地

域との連携はこう、端末図書館とはこう、みたいなものが、もう少し整理されて、区別された形で出てきたほうが。同じワンパターンのデータの提示の仕方ではなくて、それぞれの目的意識にあったデータの取扱いとか、提示の仕方っていうのが見えてくるともっとわかりやすいのかなって思います。

- 議 長 はい、ありがとうございます。御意見ということでよろしいですか。
- 委 員 質問でもありますけど。
- 委 員 今回、子どもの読書活動推進計画の話ですので、図書館全体の話はなかったのかな、と思いますが。
- 委 員 ただ、今言いましたように、地域の子ども。遠くの子どもとか、色々いますので、図書館が使える環境にある、使えない環境。一時間かかるよ。そこをいっしょくたに考えるか、別個に考えていくべきか、というところがちょっと見えないという質問です。
- 議 長 はい、ありがとうございます。
私も今お伺いしていて、小中学生の読書に関するアンケートともちょっと関りがあるのかなと思いますので、いかがでしょう。
- 次 長 今おっしゃっていたとこで、大事なところだと思うんですけど、ここ4～5年で学校図書館の整備を進めています。ただ、整備が進めば進むほど、子どもたちが中央図書館には行かなくなってしまうような。分散すると言いますか、それはそれで大事だと思いますが、今そういう状況にあると思っています。まして、小さいまちみたいに学校図書館を開放して地域に開放していたり、個人で読書やられていたりですね、大学にもあってっていう。どんどん分散して、ニーズに合わせて。そんな中で図書館の役割っていうのは、やはり中央図書館に行けばこれがあるというような棲み分けを大きくしていかないとだめなのかなと思いますし、沼ノ端のほうに子ども用の図書館みたいに、少し特色あるものを造ったりもしていますので、そういった中でも、中央図書館に足が向くような仕組みづくりをしながら、先ほどのイベントもそうですけど、全体で考えていかなくてはいけないなとは思っています。そういったことも含めて、この計画に盛り込めればいいのかと思いますので、色々御意見いただければと思います。
- 議 長 ありがとうございます。
- 委 員 アンケート項目がないので判断できないんですが、図書館を利用して

いるしていないというアンケートの図書館という定義の中には、例えばのぞみとかにある図書コーナーは含まれていなくて、あくまでも中央図書館なんですか。

○事務局 中央図書館やコミセンなどに入っている図書コーナー、移動図書館車に行くか行かないかという設問です。

○委員 そしたら、別に中央図書館だけじゃないんじゃないですか。今の説明だと、中央という話をしていましたけど、各地区のコーナーも含まれているのであれば。

○次長 そうですね。ただ、ここはここで大事ですっていうところで。

○委員 今の話を聞いていて思ったのは、学校の図書館を整備すればするほど、この中央図書館の利用は減っているというようなお話をされたと思うんですけど、ということは、中央図書館だけではなくてコーナーも含めて減っているということでもいいですか。

○事務局 はい、5年間の経過で見ますと、全体でも減っていますし、中央とコーナー8館まとめたの比較でも、どちらも下がっています。図書コーナーに関しては、中央図書館よりも減少率が高い傾向にありますので、全市的にやはり、図書コーナー含む公共図書館に行かなくなっている傾向はあるという風に押さえています。

○委員 さきほど、学校のICT化の話もあって、そこで活用策が今のところあまり想定されていないということだったんですけど、例えば、中学校の図書館も今整備しているって話があって、どちらも市のものだと思いますので、学校と公共図書館の蔵書検索を一緒にするっていうのは不可能なんですか。

それぞれの小中学校の図書館を、コーナーと同じような扱いにするようなことができれば、自動的に蔵書検索も対象に入ってきますし、小中学校にない本をリクエストすればそこで借りることができたりとか、その逆もあるんですけど。今、市民は中学校にある本を借りられない、でも、一緒になればそれぞれできますよね。そういうことは将来的に不可能なんでしょうか。

○事務局 可能ではありますけれども、現在、市内小中学校合わせて37校。その中で、公共図書館と同じシステムを整備していくという形になりますので、財政状況ですとか、学校図書館も皆さん、学校独自で整備しているんじゃないと思いますので、まずその統一という話もでてくると思います。

- 委員 ラベルを貼り直したりとか全部やったりすると思うんで。
- 事務局 はい、ラベルですとか装備ですとか、目録の統一。そういったこともありますので、委員おっしゃっていただいたとおりに、技術的には可能ではあります。ただ、苫小牧市規模で始めようとする、なかなか時間がかかるものと考えています。
- 委員 新しい本からとかになるんでしょうね。
- 事務局 はい。何かのタイミングでできる可能性はあると思いますし、今後、公共図書館と学校図書館のシステム的な連携は検討が必要になってくるとは思いますけれども、ここからできますということは、今、お示しできないというところが現状です。
- 委員 ありがとうございます。
- 議長 今後もし、委員がおっしゃっていたようなシステムができるとしたら、例えば、学校の図書館であれば、子どもたちの貸出が優先になったり、地域開放の図書館であれば、地域住民の方が優先になるのかとか、そういう整備も少しずつ必要になっていくのかな、と思いますので、その辺を含めての推進をお願いしたいと思います。
- 他に御意見、また関連して質問だとかございますか。
- 委員 今回、読書アンケートがありました。基本的に数字だけなんですよね、今回私たちが受け取っているのが。やはり、自由記述で、どうして本を借りないのかとか、ほんとはこの本あったら借りるんだけどな、といった、子どもたちの生の声があったら、問題解決のちょっとしたきっかけになるんじゃないかなと考えています。もし今後、アンケートをとることがありましたら、ぜひ、自由記述で、子どもたちが好きなこと書いて良い欄を作っていただければ、とてもいいかなと思いました。
- 議長 ありがとうございます。
- 「読みたくないから」等、色々書いてありますけれども、具体的にどういう気持ちでこのような選択をしたのかは、私もぜひ聞いてみたいなと思っていました。
- ほかにもございますか。
- 委員 夏が暑くなってくる傾向にありまして、やはり今の子どもは、冷房の部屋から出たくないという生活習慣の中で生きていますから、わざわざ土日であっても、平日であっても、クーラーの無いところには来ないのかも知れない。そういうことも考えて、今、直接的な関係はないかも

知れませんが、設備の改善みたいなお話していいのかなあと。

○事務局 実際に今年は猛暑でしたので、図書館にもクーラーをつけて欲しいというご意見をたくさんいただいておりますが、優先順位ですとか財政状況等もごさいます。今後、大規模改修等もごさいますので、どういったときに、そういったお声を反映できるか検討させていただく形になると思います。涼しいところで勉強したい、という声もいただいておりますので。

○次長 学校には、簡易クーラーをつけることにしましたので、夏休みとかに図書室に持って行って、涼しくするとか良いかなと今、思っていましたので、ちょっと提案させてもらおうかなと。

○議長 過ごしやすい環境で読書ができればいいですね。ほか、ごさいますか。

○委員 委員がおっしゃった通り、本を読まない子どもたちの図書館に来る理由が、クーラーがあるから、でもいいんじゃないかなと思いました。そういう意味で、何回か言いましたが、映えとか写真とか送るのに、今、コロナでできないんだけど、ベビーアートをここで前にやった時にすごく好評だったってことを聞いているんです。それは、もしかしたら読むことには関係ないんだけど、いわゆる図書館を知ってもらおうという形で行ってもいいのかなって。特に苫小牧市、確かサブカルチャーの活動をしていたはずだと思ったので、そういう関係でも。例えば、今度コスプレフェスタとかありますよね。そういうのも、図書館でやってるよ、とか、図書館の職員が図書館戦争のコスプレしてるとか。いわゆる、本当に本を読まないんだけど、ただ見に来るっていう人たちが来れるようなイベントなどがあっても良いかなと、クーラーつながりで思ったので、予算内でできたらやっていただきたいと思います。

○議長 ありがとうございます。

ほか、ごさいますか。それでは、他になればそろそろ本日の議事については、終了させていただきたいと思います。とても活発な御意見をたくさんいただいて、うまくまとめられず申し訳ありませんでしたが、皆さんに助けていただきました。ありがとうございました。

ではこれで、進行を事務局にお返しいたします。

(終了 14:55)

<出席者>

○委員

一谷誠子	副会長
赤川明美	委員
和泉雅子	委員
奥村訓代	委員
亀山仁美	委員
村本充	委員
原口祐子	委員

○事務局

教育部	園田部長
同	斎藤次長
生涯学習課	河本課長
同	斉藤課長補佐
同	戸澤主任主事
同	仲世古主任主事
中央図書館	富田館長
同	松平副館長

<欠席者>

○委員

松井操人	会長
坂木真吾	委員
八島恵利子	委員